

それぞれの立場からの看取り

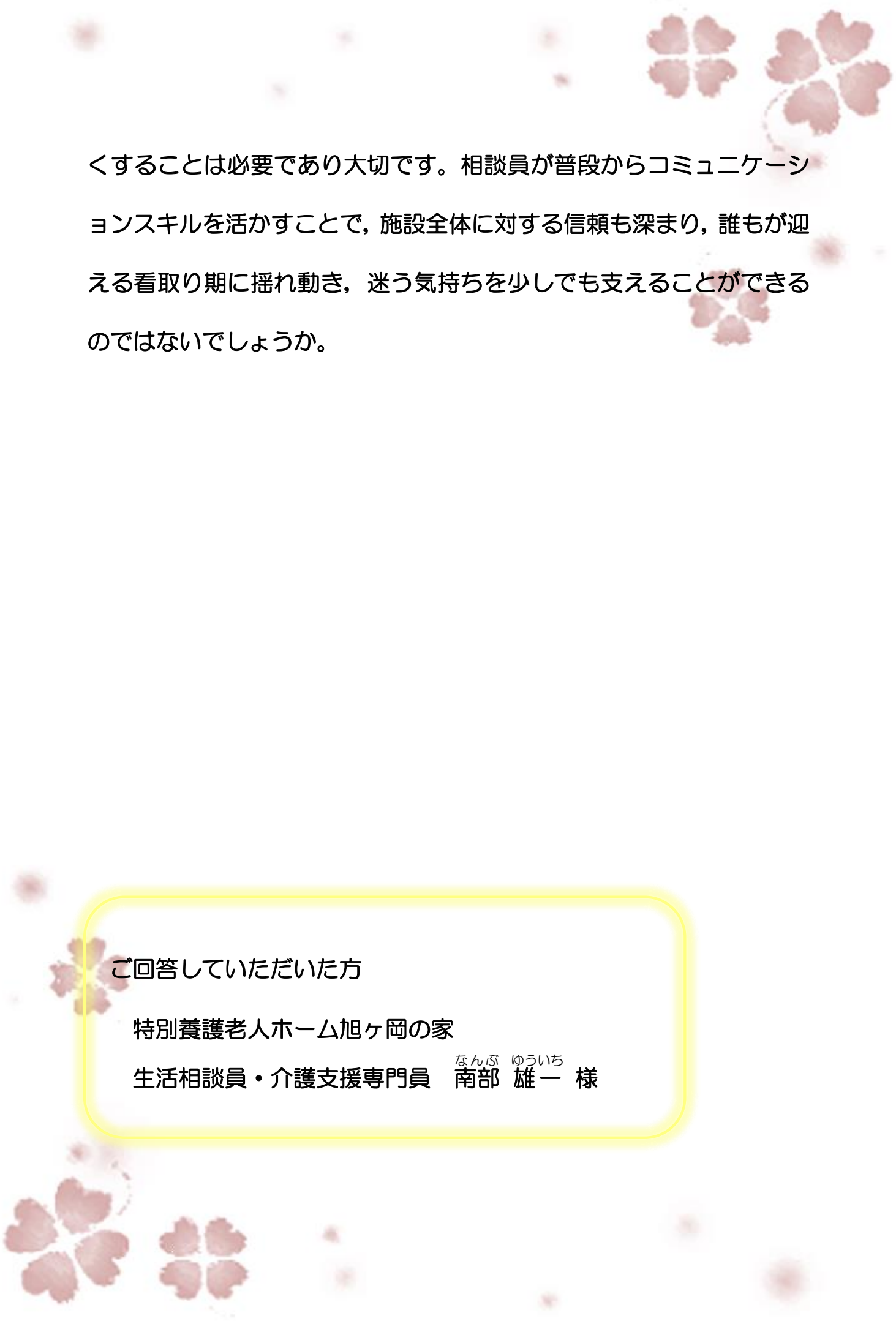
第2回 『施設相談員』

今回、「看取り場面での相談員の役割」というテーマでコラムを書かせていただくことになりましたが、相談員の役割は看取り場面においても、基本的には日常と変わらないと思っています。なぜなら、「看取り介護」とは「普段の生活の延長」であるからです。普段からのご本人やご家族、他職種（スタッフ）との関わりが重要となります。

相談員の仕事内容は多岐に渡り、事業所によって仕事内容も異なると思いますが、下記のようなコミュニケーションスキルが、どの場面においても重要になると思います。

- ・事業所が提供するサービスを丁寧にわかりやすく説明できる。
- ・ご意見に耳を傾けニーズを把握し、将来的なニーズを想像できる。
- ・ニーズに応えられるように、スタッフと話し合って答えを出せる。
- ・施設としてのケアに関する見解をわかりやすく伝え、提案できる。
- ・普段、直接身体介護や看護を行わないため、適度な距離感を保ちやすく客観的な判断ができる。

そして、看取り期は、その方の人生の総まとめの時期ですから、普段よりも時間にゆとりを持ち、思い出話などを交えながら、かかわりを多



くすることは必要であり大切です。相談員が普段からコミュニケーションスキルを活かすことで、施設全体に対する信頼も深まり、誰もが迎える看取り期に揺れ動き、迷う気持ちを少しでも支えることができるのではないのでしょうか。

ご回答していただいた方

特別養護老人ホーム旭ヶ岡の家

生活相談員・介護支援専門員 なんぶ ゆういち 南部 雄一 様

それぞれの立場からの看取り

第1回 『医師』

〈看取りの場面で医師の役割〉

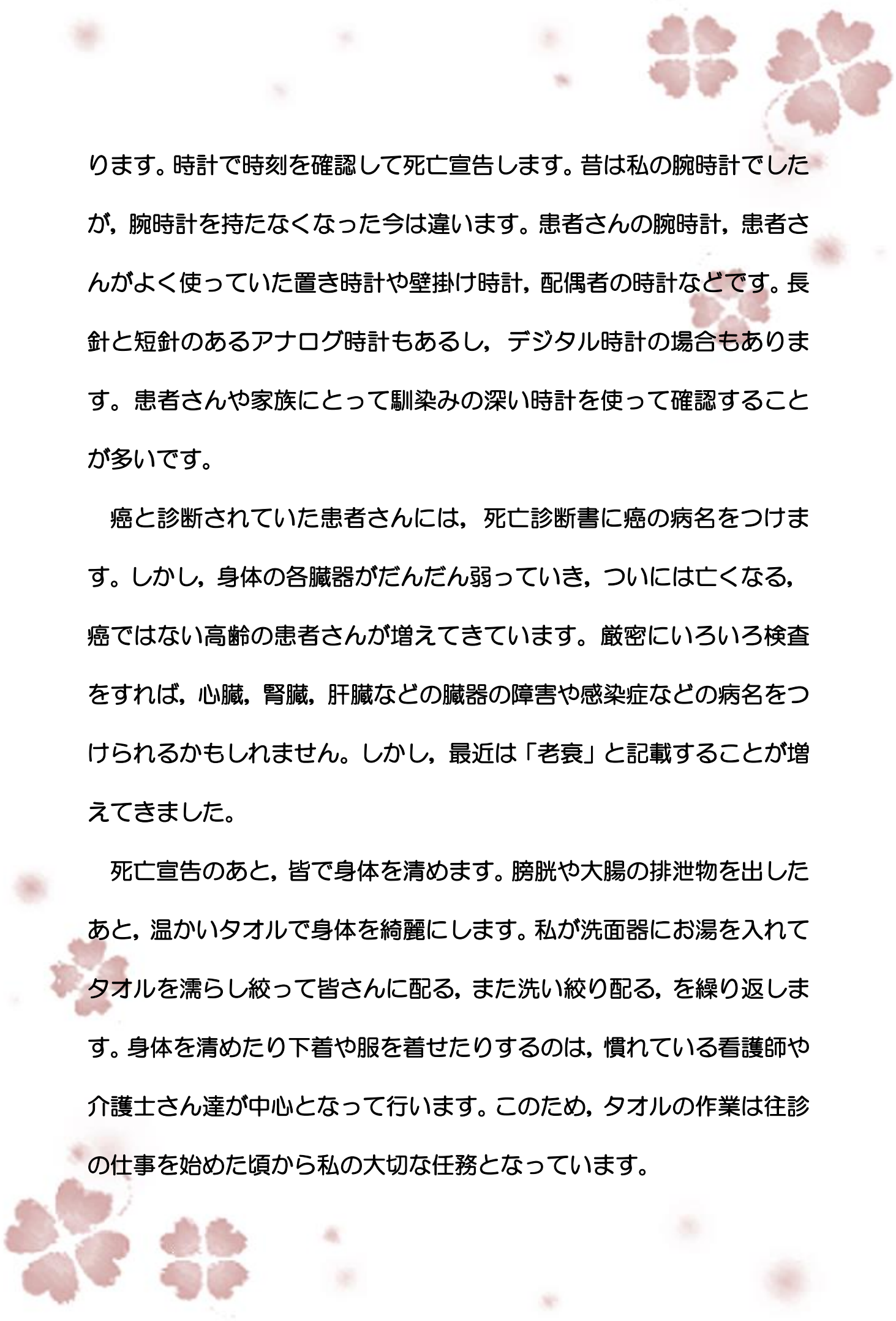
職種による役割が比較的明瞭な病院内部の看取りと違い、自宅や施設の看取りは、医師もチームの一員として働く場合が多いので、医師としての役割は少ないように思います。

まず、一般論を説明して、次に施設で亡くなられた患者さんの1例を紹介します。

〈一般論〉

「息をしていない、冷たくなっている、反応がない。」などの連絡が病院に入り、往診します。部屋に入ると皆さんの視線が一挙に私達の方に向けられます。まず、その場に集まっている家族を含めた人達に、「皆さんご苦労さまでした。」と“ねぎらい”の言葉をかけます。すぐには死亡確認をしません。沈黙の時間が流れます。その場にいる人達の表情を見ていると、亡くなった人に向かっていた気持ちがふと私に移り、私がこれから何をしようとしているのかが分かる雰囲気になります。

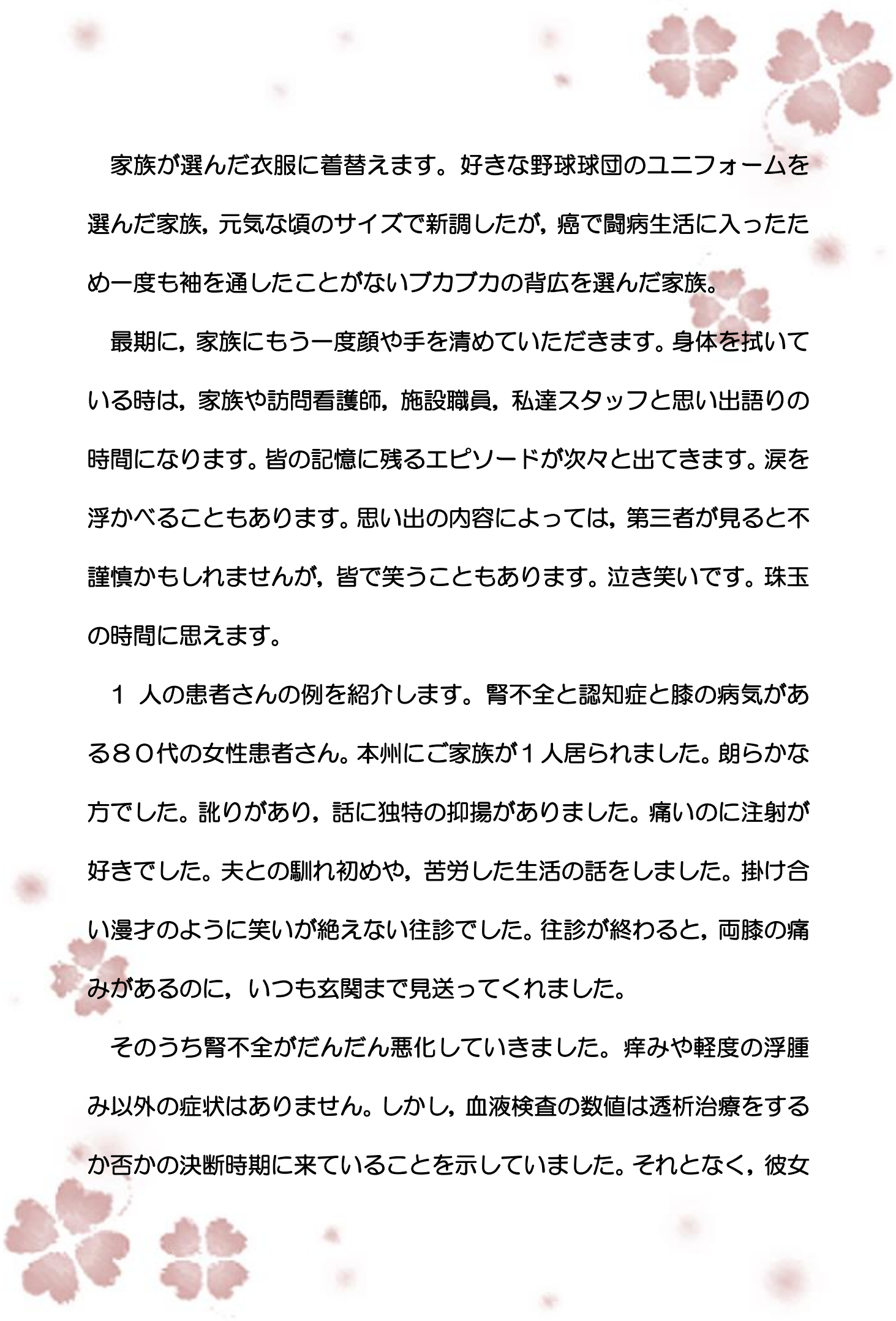
その時「それでは確認させていただきます。」と言って確認の作業に移



ります。時計で時刻を確認して死亡宣告します。昔は私の腕時計でしたが、腕時計を持たなくなった今は違います。患者さんの腕時計、患者さんがよく使っていた置き時計や壁掛け時計、配偶者の時計などです。長針と短針のあるアナログ時計もあるし、デジタル時計の場合もあります。患者さんや家族にとって馴染みの深い時計を使って確認することが多いです。

癌と診断されていた患者さんには、死亡診断書に癌の病名をつけます。しかし、身体各臓器がだんだん弱っていき、ついには亡くなる、癌ではない高齢の患者さんが増えてきています。厳密にいろいろ検査をすれば、心臓、腎臓、肝臓などの臓器の障害や感染症などの病名をつけられるかもしれませんが。しかし、最近は「老衰」と記載することが増えてきました。

死亡宣告のあと、皆で身体を清めます。膀胱や大腸の排泄物を出したあと、温かいタオルで身体を綺麗にします。私が洗面器にお湯を入れてタオルを濡らし絞って皆さんに配る、また洗い絞り配る、を繰り返します。身体を清めたり下着や服を着せたりするのは、慣れている看護師や介護士さん達が中心となって行います。このため、タオルの作業は往診の仕事をはじめた頃から私の大切な任務となっています。

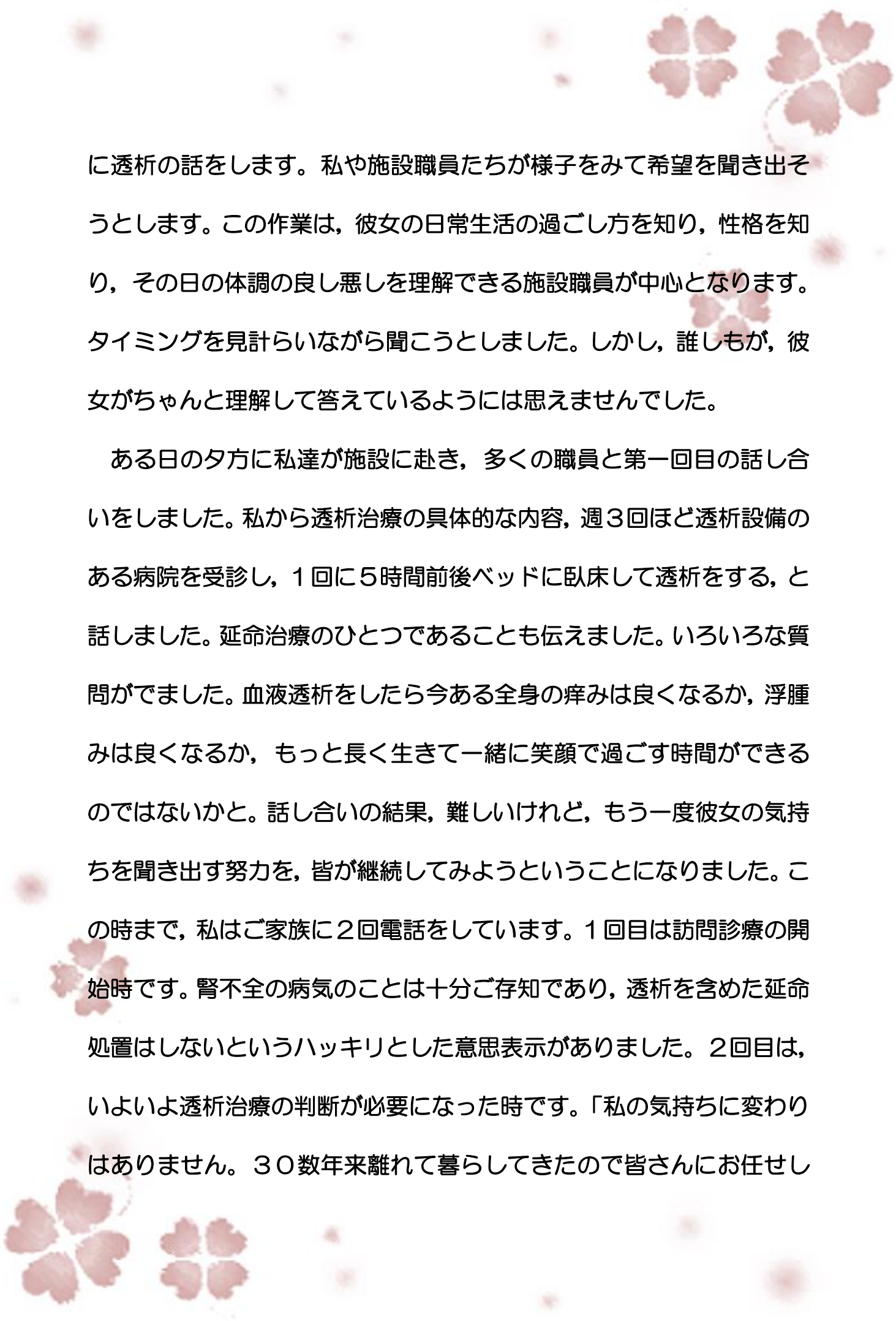


家族が選んだ衣服に着替えます。好きな野球球団のユニフォームを選んだ家族、元気な頃のサイズで新調したが、癌で闘病生活に入ったため一度も袖を通したことがないブカブカの背広を選んだ家族。

最期に、家族にもう一度顔や手を清めていただきます。身体を拭いている時は、家族や訪問看護師、施設職員、私達スタッフと思い出語りの時間になります。皆の記憶に残るエピソードが次々と出てきます。涙を浮かべることもあります。思い出の内容によっては、第三者が見ると不謹慎かもしれませんが、皆で笑うこともあります。泣き笑いです。珠玉の時間に思えます。

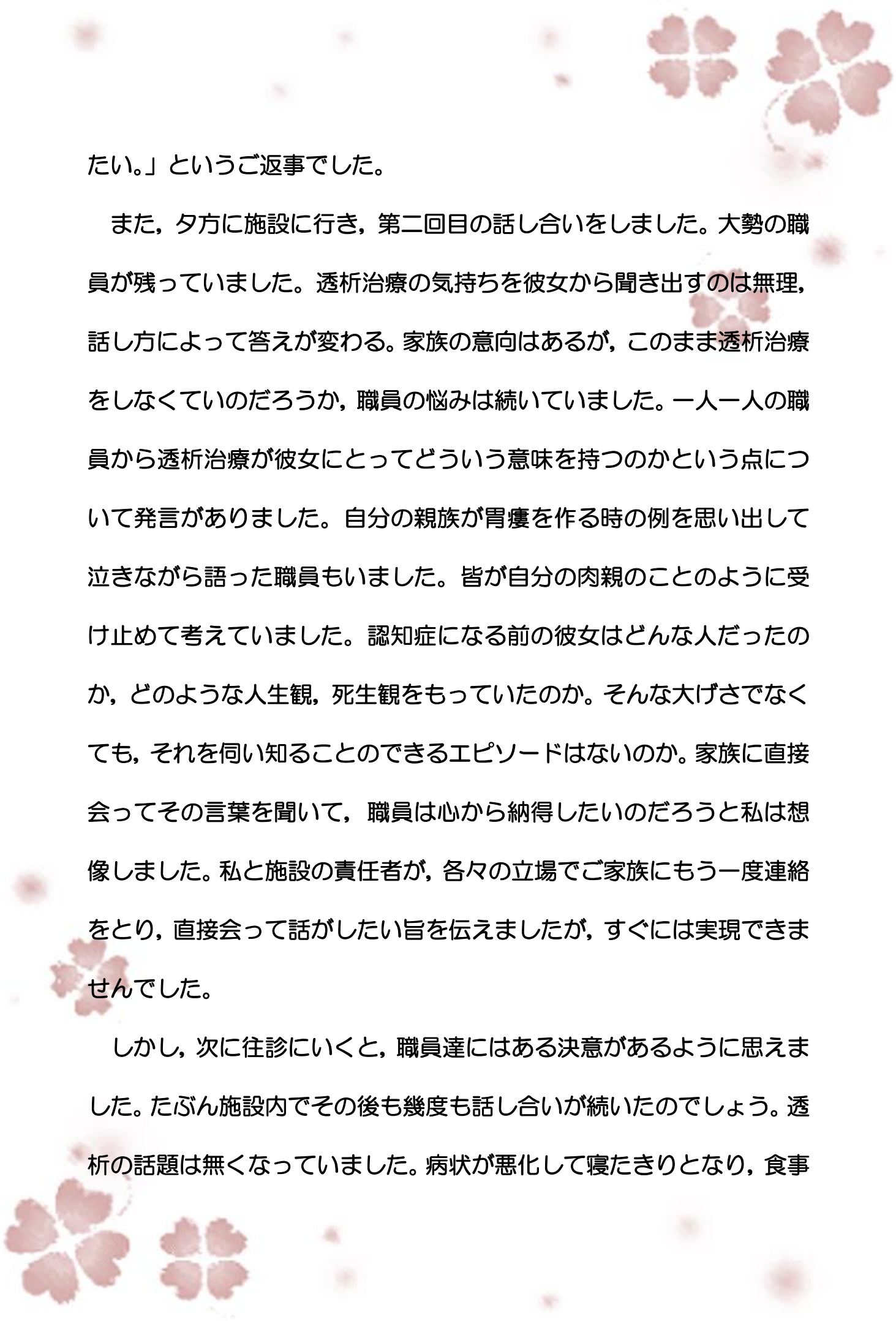
1 人の患者さんの例を紹介します。腎不全と認知症と膝の病気がある80代の女性患者さん。本州にご家族が1人居られました。朗らかな方でした。訛りがあり、話に独特の抑揚がありました。痛いのに注射が好きでした。夫との馴れ初めや、苦労した生活の話をしました。掛け合い漫才のように笑いが絶えない往診でした。往診が終わると、両膝の痛みがあるのに、いつも玄関まで見送ってくれました。

そのうち腎不全がだんだん悪化していきました。痒みや軽度の浮腫み以外の症状はありません。しかし、血液検査の数値は透析治療をするか否かの決断時期に来ていることを示していました。それとなく、彼女



に透析の話をします。私や施設職員たちが様子を見て希望を聞き出そうとします。この作業は、彼女の日常生活の過ごし方を知り、性格を知り、その日の体調の良し悪しを理解できる施設職員が中心となります。タイミングを見計らいながら聞こうとしました。しかし、誰しもが、彼女がちゃんと理解して答えているようには思えませんでした。

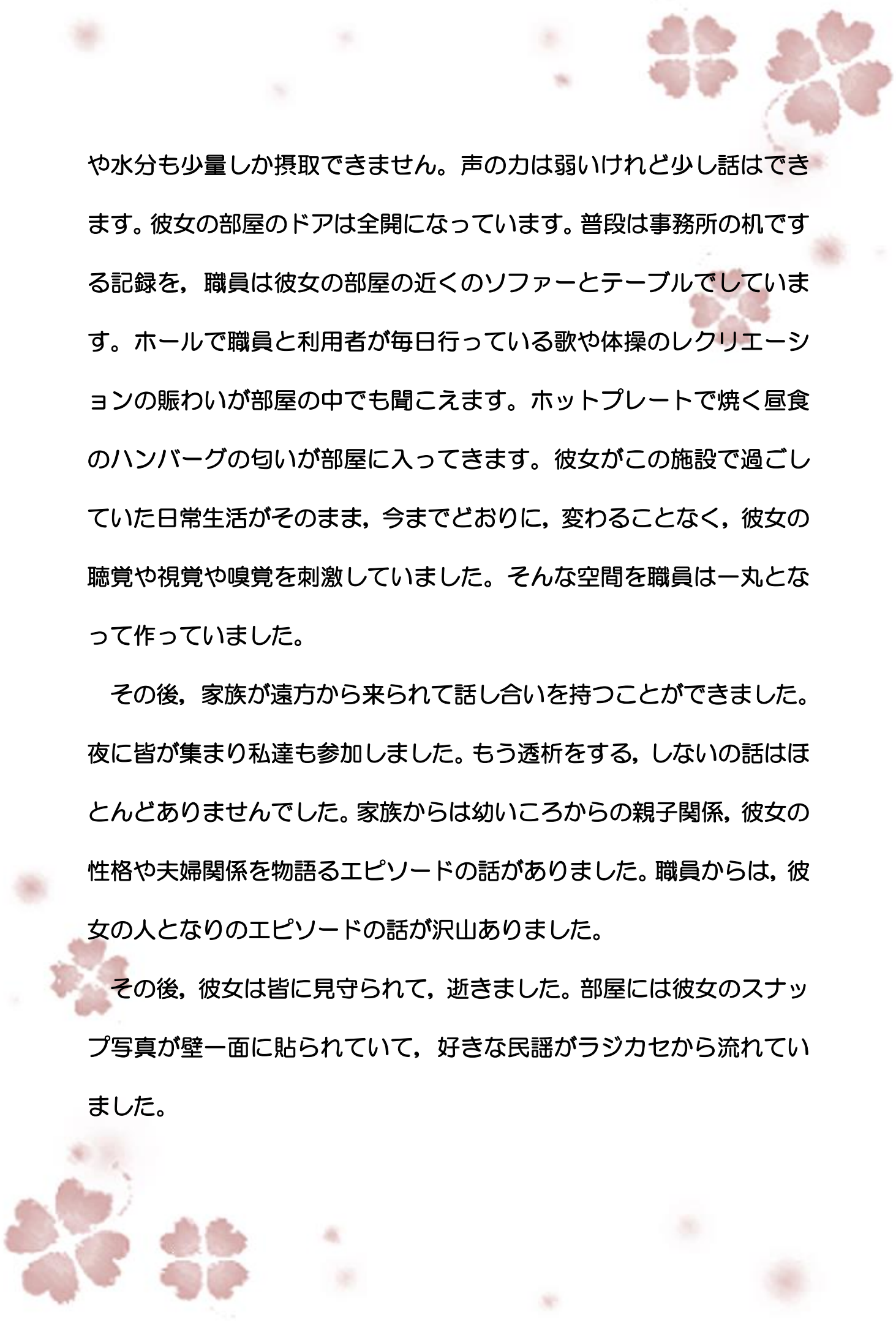
ある日の夕方に私達が施設に赴き、多くの職員と第一回目の話し合いをしました。私から透析治療の具体的な内容、週3回ほど透析設備のある病院を受診し、1回に5時間前後ベッドに臥床して透析をする、と話しました。延命治療のひとつであることも伝えました。いろいろな質問がでました。血液透析をしたら今ある全身の痒みは良くなるか、浮腫みは良くなるか、もっと長く生きて一緒に笑顔で過ごす時間ができるのではないかと。話し合いの結果、難しいけれど、もう一度彼女の気持ちを聞き出す努力を、皆が継続してみようということになりました。この時まで、私はご家族に2回電話をしています。1回目は訪問診療の開始時です。腎不全の病気のことは十分ご存知であり、透析を含めた延命処置はしないというハッキリとした意思表示がありました。2回目は、いよいよ透析治療の判断が必要になった時です。「私の気持ちに変わりはありません。30数年来離れて暮らしてきたので皆さんにお任せし



たい。」というご返事でした。

また、夕方に施設に行き、第二回目の話し合いをしました。大勢の職員が残っていました。透析治療の気持ちを彼女から聞き出すのは無理、話し方によって答えが変わる。家族の意向はあるが、このまま透析治療をしなくていいのだろうか、職員の悩みは続いていました。一人一人の職員から透析治療が彼女にとってどういう意味を持つのかという点について発言がありました。自分の親族が胃瘻を作る時の例を思い出して泣きながら語った職員もいました。皆が自分の肉親のことにように受け止めて考えていました。認知症になる前の彼女はどんな人だったのか、どのような人生観、死生観をもっていたのか。そんな大げさでなくても、それを伺い知ることのできるエピソードはないのか。家族に直接会ってその言葉を聞いて、職員は心から納得したいのだろうと私は想像しました。私と施設の責任者が、各々の立場でご家族にもう一度連絡をとり、直接会って話がしたい旨を伝えましたが、すぐには実現できませんでした。

しかし、次に往診にいくと、職員達にはある決意があるように思えました。たぶん施設内でその後も幾度も話し合いが続いたのでしょう。透析の話題は無くなっていました。病状が悪化して寝たきりとなり、食事



や水分も少量しか摂取できません。声の力は弱いけれど少し話ができます。彼女の部屋のドアは全開になっています。普段は事務所の机である記録を、職員は彼女の部屋の近くのソファとテーブルでしています。ホールで職員と利用者が毎日行っている歌や体操のレクリエーションの賑わいが部屋の中でも聞こえます。ホットプレートで焼く昼食のハンバーグの匂いが部屋に入ってきます。彼女がこの施設で過ごしていた日常生活がそのまま、今までどおりに、変わることなく、彼女の聴覚や視覚や嗅覚を刺激していました。そんな空間を職員は一丸となって作っていました。

その後、家族が遠方から来られて話し合いを持つことができました。夜に皆が集まり私達も参加しました。もう透析をする、しないの話はほとんどありませんでした。家族からは幼いころからの親子関係、彼女の性格や夫婦関係を物語るエピソードの話がありました。職員からは、彼女の人となりのエピソードの話が沢山ありました。

その後、彼女は皆に見守られて、逝きました。部屋には彼女のスナップ写真が壁一面に貼られていて、好きな民謡がラジカセから流れていました。

〈最期に〉

私は何をしたのだろうと振り返ります。私が何事かをしたのではない、患者さんや家族、施設職員の気持ちがまずそこにある、それに私や同僚看護師や訪問看護師やケアマネジャーや患者さんにかかわる全ての人達の心が揺り動かされる、そして何とかしたい、何とかしよう、という気持ちになる。チームの気持ちがだんだん昇華していく。彼女のことは、ずっと脳裏に残る、大切な時間を共有したと思います。1人ではできない、本当の意味のチーム、患者さんに対して、1回きりのオーダーメイドのチームの作業。

往診をしてご自宅や施設の看取りを経験していく中で、私の死生観も少しずつ変化していきました。幼少期に祖父の死に立ち会い、祖父が骨になった場面を見てからは、ずっと死は恐ろしいものでした。しかし、今は違います。私が死んだら、私の事を知っている人達の記憶に数年でもいいから残り、時々思い出してもらい、そしてだんだん消えていく。それで良いと思っています。

ご回答していただいた方

医療法人道南勤労者医療協会函館稜北病院

内科医長・訪問診療科科長 よこくら もと 横倉 基 先生